

これは私が見たことじゃないけれど、それについて聞いたことがある。マダガスカル人がここにやって来た時、ここはクルクと呼ばれていた。三人の王がいて、ひとりのアフリカ人の名前はファタヒだった。それからラムサラがやって来た。彼が来た時、この地方はクルクと呼ばれていた。それから、彼が人々を治しに来て、ここはマハザンガと呼ばれるようになった。でも、フランス人たちが来て、彼らはマジヤンガと呼んだ。この頃は町なんてものはなく、林しかなくて、家というよりも小屋があっただけだった。そういうわけで、人が住むようになって、病気になった人をここに来させて、世話をしたり治療をしたりしていた。だから、こう言われていた「マハザンガに行こう」と。マハザンガというのは、人を治療するためのなにかで、マハザンガとは、和らげる(治療する)という意味で、そこからここはマハザンガと呼ばれるようになった。それから、フランス人が来て言った「ここはマジヤンガだ」。彼らはマハザンガと言えなかったのだけれど、この人たちは、この地方の人たちはマハザンガと呼んだ。でもフランス人はマジヤンガと言っていた。それから、アラブ人も来てマジヤンジャと言った。彼らも[マハザンガと]言えなかった。でも、マダガスカル人、この地方の本当の持ち主の中に、アンタラウシという人々がいた。彼らはムスリムのマダガスカル人だった。彼ら自身は町をムガヤと言っていた。というのも、マガヤというとてもいい香りのするものがあつたからで、それは花で、何しろいい香りがした。そう、花はマガヤだけれど、彼らはこの場所を、ムガヤの町と呼んでいるんだよ。この花が理由で。

イギリス人が来るまではそんな具合だった。[イギリス人が着てからは]人々は真っ暗闇の中にいた。私はこの時代を知らないけど、話してくれた。私は何も見ていないけど、おばあさんたちがこういう話をしてくれたし、おかあさんたちもこの話をしていた。私はそれを聞いていたんだ。どうやら、深い暗黒のときがあつたようでそれは 1942 年だった。フランス人がここマジヤンガに来た時だった。フランス人とイギリス人、イギリス人と黒人、彼らがここにやって来て、大混乱を引き起こした。大騒動を引き起こしたのはイギリス人ではなくて、黒人たちで、彼らが混乱を起こし、あちこちで逃げ出した。...彼らには死んだ者も生き残った者もいた。ある者は隠れてそこからここに身を寄せて彼らの町にした。わたしが聞いたのはこれだけ。

それほど昔ではないけれど、恐ろしい争いごとがまたあつた。それは、1960, 70 年代、そんなに遠い昔じゃない。多分あんたも少しは覚えているだろう。ここで起こった「恐ろしいこと」のことを。覚えてない？ ここにいなかったのならどこにいたんだ？ それじゃ、ンガジジャ(コモロ)にいるのでもないんだね。サベナと呼ばれている人たちがいるのを知っているかい？ それでコモロ人たちは、ベツィレーバカたちにみんな殺されてしまったんだ。首を刎ねたんだよ。それはベツィレーバカの子供のことで始まったのさ。その子がうんちをして、コモロ人がその大便をつかんで、その子に塗りたくったんだ。それで人々が争い、死人は出るし、大混乱になって、サベナ[航空]がやってきて、[コモロ人を]乗せて帰れるようにした。それは、アリ・ソワリヒの頃だった。[コモロの]人々が収容されて、ンガジジャに帰れるように乗せたんだよ。私はここにいたんだ。覚えているよ。見たんだよ。サベナたちを。人々が殺され、山羊たちが殺され、それをコモロ人の首の上に置いたんだ。コモロ人は首を刎ねられていたんだ。最初はコモロ人の方が優勢だったけど、そのうちに国が介入してきて、国が火を放ち、家を焼き、人々を焼いたんだ。もし国の介入がなければ、マダガスカル人は

皆殺しになっただろうよ。それにしても、コモロ人たちは、神に讃えあれ (allamdulilahi), 強かったよ。でも国が介入してきてたくさん殺されてしまった。私が知っているはたったこれだけだ。